

大ロル・アタベク領の成立

北川 誠 一

始めに

ロル人の国を意味するロレスターンは、歴史地理上の名称としては、漠然とイラン・ザグロス山地南部のロル人の居住する地域を指す。今日、行政上のロレスターン地方長官区がホッラマバードを中心とする面積三一、三八三平方キロメートルの一州であるのに対し、西イラン語に属するロル語の幾つかの方言を用いる広義のロル系諸種族の分布は遙かに広い。これを簡単に言い表すと、ケルマンシャー、ハマダーン、イスファハーン、シーラーズ、アフワーズ等の諸都市を結ぶ線の内側のザグロス山地とホズイスターンの平地が広義のロレスターンであることができ。一二世紀以来この広義のロレスターンはデズフル川 (Ābi Dizfūr) の支流デズ川 (Ābi Diz) を境に大小に二分されそれぞれをハザールアスプ (ファズルーイェ) 朝、ホルシード朝が支配していた。大ロルは、ハザールアスプ朝がティムール朝に滅ぼされた後、サファヴィー朝の時代にバフティヤール部族連合として再編成された。バフティヤール地方には、一九四三年以降「チャハール・マハルとバフティヤール」地方長官区が設置されているが、これはかつての部族連合勢力範囲の一部でしかなく、大ロルの首都イージェすらも含まれていない。

ロレスターンは、エラム文化圏に含まれ、さらにササン朝時代には、首都スーサの後背地として遺跡に富んでいる

にも関わらず、地方史とロル人の種族形成史はほとんど知られていない。ロル人の社会が外部に知られるようになったのは、大ロル、小ロル二つの地方政権が成立した一二世紀からである。一三—一四世紀のモンゴル人の支配下にも、大ロルのハザールアスプ朝と小ロルのホルシード朝は所領支配を守り抜いた。特にハザールアスプ家はアッバース朝カリフ、ホラズム帝国、イル・ハーン国、ムザッファル朝、ティムール帝国と密接な関係を持ちつつ領域支配権を維持しただけでなく、なかでもイル・ハーン国の南イラン支配の要の役を果たし、自己の支配圏を拡大した。ロレスターンがイル・ハーン支配下南イランの文化的興隆の一翼を担ったことは確かである。ここでは、一二—一五世紀南イラン政治史に重要な位置を占めると思われる大ロルのハザールアスプ朝成立の過程を明らかにしたい。

ロル人の歴史が知られていない理由のなかで、もっとも重要であるのは、彼等自身によって歴史記述がされなかったことであろう。ここでも、外部史料すなわち総合的なイスラーム史や各時代の中央政権の王朝史的年代記中の関連記事⁽¹⁾と地方王朝の王統誌を集成した一四世紀のムスタウフイーの『選史』⁽²⁾、シャバンカラーイーの『系譜集成』⁽³⁾、一五世紀ナタンズイーの『ムンタハブツタワリーフ』⁽⁴⁾、一七世紀ガッファアーリーの『世界を飾る者の歴史』⁽⁵⁾等の比較的簡単な記事を頼ることができるに過ぎない。ビトリスイーの『シャラフナーメ』⁽⁶⁾、リサン・アッ・ソルタナの『バフティヤールの書』⁽⁷⁾は、独自のものであるが、この題目に関する限り、史料価値は高くない。

ロレスターン史研究の蓄積は厚くなく、ウラディーミル・ミノルスキーが『イスラーム百科事典』初版のために執筆した項目「ロレスターン」、「大ロル」、「小ロル」、「ロル」、「シェーリスターン」⁽⁸⁾等が今でも最も基本的な文献とされている。また、ベルトルド・シュプラーの「ハザールアスプ朝」⁽⁹⁾は『イラン百科事典』のために記した小項目である。

一方、イラン史研究の比較的最近の動向として、イラン人研究者による、特に現地の事情に詳しい地方出身者、居

住者による地方史研究がなされていることである。ロレスターン州については、ハミード・イーザドパナーフの二巻本『ロレスターンの考古学的歴史的遺跡』、アリー・ムハンマド・サーキーの『ロレスターンの歴史地理と歴史』等の著述があるが、対象はかつての小ロルの領域に当たる狭義のロレスターンの範囲に限られる。本稿で扱う大ロルの領域であった地域に関しては、キャリーム・アミールホセイニーに、『チャハール・マハルとバフティヤールの地理と歴史』¹⁰、『バフティヤール地域の知識』、『チャハール・マハル地域の知識』¹³があり、ホズイスターンとクーフ・イ・ギルイーエについてはアフマド・キャスラヴィーの『ホズイスターン五〇〇年史』¹⁴、ガウバ『南イラン・アラジャーン—クーフ・イ・ギルイーエ州—アラブ征服からサファヴィー朝まで』¹⁵、アフマド・イクタダリー『ホズイスターン、クーフ・イ・ギルイーエ、ママッサニー—歴史地理と古代遺跡』¹⁶などが発表されている。ヨーロッパ人によるものでは、ギー・レストレインジ、ドロティア・クラウルスキーの歴史地理研究も重要である。¹⁷

また、ロレスターンの歴史は、イル・ハーン国のイラン支配に関して、ハンマー・ブルグシュタル、ドーンソン、ハワース、ベルトルド・シュプラー¹⁹、アッバース・イクバル²⁰、ホセインクリー・ソトウーデ²¹等の歴史家によって随時述べられているが、しかしこれらはイル・ハーン国史記述の必要からロレスターンに言及しているか、あるいは単に中央の王朝史的にはあまり重要でない地方の問題として概述、総覧を試みているのであって十分に実証的、分析的であるとは言えないであろう。イル・ハーン国の成立はイラン史にその前後を画する影響を与えたが、イランがイランとして存続しえたのはイラン人社会と地方王朝がモンゴル人支配下にも生き存えたからである。そのイラン人社会と地方王朝は、地域的、種族的、社会的、経済的、宗教的に見て単一ではない。しかも、この時ロレスターンは、経済的文化的にはイスファハーン、シーラーズにおよばなかったとしても政治的軍事的には、重要な役割を果たしていた。このような観点から見ると、南西イラン中世史研究は十分であるとはいえないのである。

第一章 ハザールASP家の系譜

中世にロル人がもっていた伝承によると大ロルのハザールASP朝の祖先はヘジラ暦六世紀にシリアからロレスターンに移住した人々であった。ウラデーミル・ミノルスキーは、かつて、シリアにクルド人ファズルーヤ (Fazluya) がおり、彼の子孫はシリアを出国してマイヤーファールキーン、アゼルバイジャンを経て、ヘジラ暦五〇〇年ロレスターンのウシュトゥラーン・クーフ (Ushturn Kan) 北麓の平原に住みついたが、アブターヘルが、ファールスのサルグル朝に仕えた後に大ロルを領有し、王朝の基礎を築いたとする。アッバース・エクバルは、この移住者の長は、ファズルーイエの九世の子孫アブターヘルであるとし、アブターヘルには、兄弟ムハンマドがいて、兄弟が一族を支配していた間バグダードのカリフのもとに仕え、大ロルにイクターを与えられ、帰国後、ファールスのサルガル朝に仕えたとする。フセインクリー・ソトウーデは、ヘジラ暦五世紀に、シリア (シャーム) に、ファズルーイエがおり、彼の息子アリーはシャームを出国したとする。イブラヒム・ビン・アリーをへて、ムハンマド・アブターヘル・ビン・アリーが一族をロレスターンに導き、大ロルを領有したとする。またベルトルド・シュプラーは、シリアのクルド人ファズルーイエの子孫は故郷を出て一二世紀にウシュトゥラーン・クーフに來住し、ファズルーイエ九世の子孫アブターヘルが五五〇 (一一五五/六) 年サルグル朝から独立したと述べる。アブターヘルが王朝の基礎を築いたことでは、すべての研究者の意見が一致するが、どの記述も簡略に過ぎ、各世代の治績にも混乱が見られる。ファズルーイエの子孫の系譜に関する主要史料『選史』、『ムンタハブタワーリーフ』、『世界を飾る者の歴史』によって、王朝樹立以前の事情を詳細に検討したい。

『選史』 (Mustaufi/Navā'i, 593) 以下

(ヘジラ暦) 五〇〇年に、約百戸のクルド人が、シャームのジャバル・アッサマーク (Jabal as-Samaq) から、自分の部族の長老との間に起こった内讐のために、ロレスターンに來住し、ヴァジールであったムハンマド・ホルシードの孫の陣中に家臣として下馬した。彼等の長はアブルハサン・ファズルイーエであった。ある日ホルシード家で宴があった。アブルハサンは牛の頭を与えられた。彼は自分の部下に、自分はこの部族の長 (sarḡār) になるだろうと言った。

とあり、また、『ムンタハブタワーリフ』(Nafanzi/Aubin, 38) には、

さて、(ヘジラ暦) 五〇五年、約百戸のアラブ人がシャームのジャバル・アッサマークから來住し、ロレスターンの家臣の中に入り、ナーシルッディーン・ムハンマドのヴァズィールであったムハンマド・ホルシードの軍隊に加わった。この百人の領袖はアブルハサン・ファズルイーエと言う名であった。ある日ホルシード家は宴席で彼に煮た牛の頭を出した。彼は、我が子孫にこの部族の領袖の地位が譲られる吉兆だろうと口にした。ホルシード家の人々は怒った。

とある。ジャバル・アッ・サマークは、シリア西部アレppoとハマの間にある海拔五〇〇—一、〇〇〇メートルの低い山地で、別名ジャバル・アル・アラール (Jabal al-'Alā) 現在⁹⁰はザウヴィーイェ (Zawiye) 山地の名で呼ばれている。また、ガッファリーの『世界を飾る者の歴史』には、これらとは多少異なった記事が見え、

キーンワイフ (Kinwaih) の父方の従兄弟マキー (Maki) ・ビン・アブルハサンは、領袖となり、自分の一族をロレスターンに導き、ウシュトラークーフ北方の草原の地に住みついた。突然軍隊がこの一族に夜襲をかけ大部分を殺した。アブルハサン・ビン・マキーは、父の後を継いで四三年間、領袖であった。

とある。また、シャラフッディーン・ビトリスィーの『シャラフ・ナーメ』(Birtisi/Bachubeva, 94) には、『選史』と

同じく、『ゾブダット・アッタワーリーフ』に依るとして、ヘジラ暦五〇〇年、四〇〇家族のクルド人がロレスタールに來住して、ムハンマド・ホルシード家に仕えたが、或る時、ムハンマド・ホルシードの孫の宴でアブルハサンに牛の頭を与えたと、來住したファズルーイエ家の戸数が四〇〇である以外は『選史』、『ムンタハブッタワーリーフ』と同様の記事がある。また、宴会の主催者がムハンマド・ホルシードの孫であると、『選史』にはない記事を載せている。ハザラスプ家をウシュトラン・クーフに導いたのは、アブルハサンか、あるいは彼の父親マキーであるか、少なくとも問題の宴に出席したのはアブルハサンであったようである。『選史』にもこの宴を開いた者は、ムハンマド・ホルシードの孫であったとあるから、小ロル・アタベク家の開祖シュジャーッディーン・ホルシードの父アブーバクルかその同世代のものであつたらう。するとこの問題の宴がもたれたのは、ヘジラ暦五〇〇年代の前半と云うことになる。⁹⁴⁾

彼らの出自について、『選史』には「クルド」、『ムンタハブッタワーリーフ』に「アラブ」、また『世界を飾る者の歴史』(Chaffari/Minovi, 169)に、

アタベク・ユースフシャー一五世の祖先ムカッダマ・ファトゥフッディーン・ファズルーイエは、ケイホスローの子孫でシャームの西部(Gharbi)に住み、Toghra malik-i Maghrib-i と呼ばれ、一二〇歳まで生きた。

とあり、イランの伝説上の帝王ケイホスローであると、全く相入れないのは、年代記執筆の時点での伝承の相違を示すものであろう。一四世紀以降小ロルのホルシード家が、アリー・ビン・アブータリブの息子アッバースの子孫であると自称し始めたことが思い浮かぶのである。

『選史』と『ムンタハブッタワーリーフ』には「アブルハサン・ファズルーイエ」の父祖について述べられないが、『世界を飾る者の歴史』(Chaffari/Minovi, 169-170)は「ムカッダマ・ファトゥフッディーン・ファズルーイエ」の

子孫について、

彼の息子アリーは、父親生存中に一族の長 (Distrya) になったが、彼とシャームのスルタン達との間に争いがあつた。イブラヒーム・ビン・アリーは、彼より三年後まで生き長らえた。シャームの人々はこの一族に夜襲をかけた多くを殺した。イブラヒームは成人に達していたので、一族と共にマヤファールキーン地方に來た。六〇年間統治した。

とある。

イブラヒームの後継者は、『世界を飾る者の歴史』(Ghafari/Minov, 170) に、

キーンワイフ (Kinwaih)・ビン・イブラヒームは、復讐の機会を得、シャームの知事 (vali) を釣り (shkari-nahi) の最中に殺した。彼は、一族共々その国を離れ、家財をもってアゼルバイジャンに來た。四五年間軍隊を率いた。彼とギーラーンのアミール・ディバージ (An'ra Dibaj) の間には婚姻関係があつた。

とある。先に述べたマキーは、キーンワイフの従兄弟アブルハサンの息子とある。ヘジラ暦五世紀のことと思われるこれら一連の事件について管見のところ証明することの出来るシリア側史料は今のところ発見されていない。

次に『選史』と『ムンタハブツタワリーフ』は、アブルハサンが宴席で述べた言葉に怒つたホルシード家の人々が、狩猟中であつたアブルハサンの息子アリーを襲撃する事件を記す。アリーは瀕死の重傷を負うが、彼の猟犬がアブルハサンに事件の現場を教えたため、アリーは一命をとりとめた。ファズルーイエ家はウシュトラーン・クーフ北麓から南に再移動したようである。『選史』(Mustaufi/Navā'i, p. 539-540) に、

この時サルグル朝はファールスの知事であつたが、まだ帝王の称号を採つていなかった。アリーが死亡すると、あとにはムハンマドという名の息子が残された。彼は勇敢な若者であつた。サルグル朝に仕えて高い位を与えら

れた。「彼もまた死亡すると、アブーターヘルというクニヤの息子が残された。彼は勇敢な若者であった。アタベク・ソソコルに仕えて、高い位を得た。」アタベク・ソソコルはシャバインカーラの知事達と争いがあった。アブーターヘルに大軍を与えて彼らに遣わした。彼は戦って勝ち、ファールスに帰還した。アタベク・ソソコルは彼を愛でて、『予から何か、求めよ。』と言った。彼は一本の矢を望んだ。アタベクは心の中で、この若者には、軍を率いる望があると思った。しかし、彼の望みを叶え、別のものを望めといった。「彼は馬の焼印を求めた。彼は聞きいれ、別のものを望めといった。」アブーターヘルは、『命令と援軍がありましたら、アタベクのためにロレスターンを平らげましょう。』アタベクは彼に軍隊を与え、ロレスターンに派遣した。

とあり、また、『ムンタハブッタワリーフ』(Natanzi/Auban, 39-40)には、

彼の息子のムハンマドと言う名の者は、サルグル朝に仕え、持ち前の生来の実直さによって地位と身分を与えられた。アタベク・ソソコルがシャバインカーラの知事達と敵対し、戦争が行なわれた時、多くのよい働きをし、一層高い地位についた。アタベクは、『この奉仕に報いるために、なんなりと望みを申せ。叶えよう』と命じた。彼はアタベクの矢筒から一本の矢とアタベクの馬群の焼印を望んだ。アタベクは彼に別の望みがあると知った。数日間御前に留めて彼を大胆にさせ、他日最初の恩賞をくりかえした。すると彼はひざまずいて、アタベクを讃え、恩賞の許しを請うた。『殿の恩寵あらば、ロレスターンの諸王国を平らげましょう。』アタベクはこれが氣にいら、即座に接見の間で自ら筆をとって、安堵状を書き、彼にアブーターヘルというクニヤを与えて、ロレスターンに派遣した。

アブーターヘルがアタベク・ソソコルのシャバインカーラ遠征に功績があり、更にロレスターン遠征を命じられたことで一致するが、前者ではムハンマドとアブーターヘルを父子と、後者は同一人物としていることが異なる。ホン

ダミールの『清浄園』(N, 622)、『シャラフ・ナーメ』(Buhārī/Bachubeva, 95)では、『選史』と同じく、父子としてゐる。ところが、『世界を飾る者の歴史』(Ghafarī/Minovi, 170)では、これらと全く違ふ記述がみられる。

ムハンマド・ビン・アリーは、彼(ムハンマド・ビン・アブルハサン・ビン・キーンワイフ)の後、統治を行なう。〔四〕五年間軍隊を率いる。彼にはムハンマドとアブターヘルの二人の幸運な息子がいた。兄弟の援助によつて、アタベク・テキラ・ビン・マウドゥードが兄弟ソンコルに勝つと、兄弟を愛でて、五〇五年クーフ・イ・キールーイエ〔州〕を与えた。兄弟は父と国(ウルス)をこの州にもたらしたが、アタベク・ギンザーは機会を得ると、彼らをそこらちのかせた。五八四年アリーはシュール人の手によつて殺された。

とある。また、サルグル朝の項 (ibid., 126) であつ

アタベク・テキラ・ビン・マウドゥードは、自分の兄弟を疑い、ファズルイーエの中に赴いた。この部族の武将のアブルハサン・ファズルイーエの孫達ムハンマドとアブターヘルは、彼を助けるために来て、ある夜ソンコルを襲い、虜にし、セフィード城(Qale Sefid)に送った。テキラは彼に替わつて帝王になった。小ロル(原文のママ)のアタベク達の政権は彼から興つた。結局、彼は四年後死亡し、再び兄弟ソンコルが五五三年に死ぬまで統治権の座に即いていた。

とある。

ファールス・サルガル朝の始祖ソンコル・ビン・マウドゥードが、ファールスの支配権を握つて独立し、アタベグの称号を名乗つたのは、ヘジラ暦五四三(一一四八/九)年、没年は『世界を飾る者の歴史』にはヘジラ暦五六三(一一五八/九)年とある。『ワッサーフ史』(Wasāfī/Āyatī, 86)、『シーラーズの書』(Shirāzi/Javādi, 72)では五五八(一一六二/三)年とあるが、これが正しいであろう。ファールスのアタベク・ソンクルがシャバーンカーラに

出兵したと言う記録はないが、『選史』では殊更にムハンマドが「アタベクに即位する以前」のサルグルに仕えたこと述べられている。サルグル自身がシャバーンカラに出陣した記録はないものの、以前の支配者に従ってシャバーンカラ遠征に赴いたと考えることができよう。

しかし、マウドウッドにテキラと言う息子がいたことは他の年代記では知られていない。またソンゴルが兄弟によって位を追われたという事実も知られていない。しかし、『世界を飾る者の歴史』の記述を誤りとする⁶³ことができな
 いのは、イブヌルアスィールが、ソンクルを継いでアタベクに即位したザンギー・ビン・マウドウッドをザンギー・
 ビン・テキラ（デキラ）と誤記している点である。⁶³『世界を飾る者の歴史』には、テキラ・ビン・マウドウッドが、
 ファズルイーエ家にクーフ・イ・ギールイーエを与えたことある。五〇五年とあるのは、明らかに五五〇（一一五五/
 六）年の誤記であろう。五五〇年は、後に『選史』にアブターヘル⁶⁴の没年に近い年次として見えるからである。五五
 〇年にテキラ・ビン・マウドウッドにクーフ・イ・ギールイーエが与えられたとみなすと、ロレスターン遠征はそれ
 以前とすることができるであろう。クーフ・イ・ギールイーエは、サルグル・トルクマン族の本拠で、ソンクルもシ
 ーラーズを占領するまでここに居を構えていたのである。『世界を飾る者の歴史』は、ザンギー・ビン・マウドウ
 ド（在位一一六二／三一一七四／五）年が、ファズルイーエをクーフ・イ・ギールイーエから逐ったとするが、こ
 こは一三世紀後半アタベク・アフラスィヤーブによって再征服されることになる。ミノルスキー、ジュプラー⁶⁵が記
 したにもかかわらず、サルグル朝は家臣を派遣して自らの本拠であるクーフ・イ・ギールイーエを征服する必要はな
 かったであろう。ミノルスキーは『ムンタハブッタワーリフ』では、何人かの人々の治績が「カイド・アリー」一
 人に帰せられていると述べる。クーフ・イ・ギールイーエから逐われたファズルイーエ家は、大ROLを拓く必要に迫
 られるが、シュール人との戦いは、アブターヘルの子ハザールアスプの任務となる。

また、この時、『世界を飾る者の歴史』(Ghaffari/Minovi, 170)に、

彼の長子ムハンマドは知事になり、一〇年間軍隊を指揮した。アブータールヘルは、兄弟の代にカリフ庁に任せ、ロレスターンの私有地(アムラーク)の大部分が、彼のイクターとなった。兄に継いで部族の中心人物になり、独立の知事になった。三四年間統治し続けた。

とある。ムザッファル朝の年代記コトビーの『ムザッファル朝史』(Kotobi/Navā'i, 52)には、「一四世紀の大ロルのアタベク・プシャング (Pushang) を、

ビン・マリク・サルガルシャー・ビン・アタベク・アフマド・ビン・アタベク・ユースフシャー・ビン・アタベク・シャムスディーン・アルプアルグー・ビン・アタベク・ハザールアスプ・ビン・アブータールヘル・ビン・アリー

であると記している。アブータールヘルはアリーの息子であることが明らかである。⁸⁴しかし、アブータールヘルとムハンマドの同一性については、ここではどのような史料も提出することができない。

ロレスターンにおけるアブータールヘルの活動と没年について『選史』(Mustaufi/Navā'i, 540)に「アブータールヘルは、

可能な限りの和戦、協定、脅迫、詐欺、忍耐によってロレスターンの国を手に収めた。服属と安定を得た時、独立を望んだ。自分をアタベクと呼び、反乱を起こした。その国の国事は彼に定まった。五五〇年。「しばらく後」死亡した。

とある。ロレスターン征服過程に関する具体的な年次はあがっていない。『ムンタハブタワーリフ』も同様である。ミノルスキーは、ヘジラ暦六〇〇(一二〇三/四)年、ソトゥーデはヘジラ暦五八五(一一八九/九〇)年、シュブ

ラーはヘジラ暦五五六／一一六一年をアブータールヘルの没年とし、ヘジラ暦六〇〇年は彼の息子ハザールアスブの名が初めて史料に現われる年であるとしている。⁶³ 諸家は根拠を示さずに各人各様の説を述べている。筆者も確実な数字を挙げる事ができない。ヘジラ暦六世紀の半ば、五四七（一一五一／二）年から五七〇（一一七四／五）年までフサム・ウッディーン・シムラがセルジューク朝及びアゼルバイジャン・アタベク朝の家臣としてホズィスターンとロレスターンを領有していた。シムラの死後は息子アミランが五九〇（一一九三／四）年にカリフ軍に敗れるまでの間ホズィスターンを支配し続けた。⁶⁴ ファールス・サルグル朝とアゼルバイジャン、ホズィスターンの支配者は、征戦を重ねたので、サルグル朝の宗主権下にファズルーイェ家の所領が創設されれば、ファールスの西部国境を完全に防御するものとなったであろう。アブータールヘルは両イラクにおけるセルジューク朝支配の終了とアッバース朝の再興という時代に生きたのである。

アブータールヘルには、『選史』(Musta'ifi/Navā'i, 540)によると、ハザールアスブ、バフマン、イマードッディーン・パフラヴァーン、ノスラットッディーン・アフマド、キズイルの五子があった。『ムンタハブタワーリフ』(Nafanzi/Aubin, 40)は、ノスラットッディーンにイールヴァークーシュ (Ivākush) の名を与えている。

第二章 ハザールアスブ朝の成立

ハザールアスブの治績の第一は、イーゼ (Idhe) に首都を選んだことで、『ムンタハブタワーリフ』(Nafanzi, Aubai, 40) じ

自分の統治の期間に、ダール・アル・イスラーム、マール〔イ・アミール〕(Mā'i Amir) をダール・アル・サ〔ル〕タナとした。

とある。マールミール別名イーゼ、又はイーゼジュ (Idhej) は、北緯三一度五〇分東経四九度四五分、高度三、一〇〇フィート、カールーン川支流岸のギャルムシールにある。伝統的には、ホズィスターン州の同名のクーラの主邑であるが、ハザールアスブ朝以降マールミールの名で知られている。⁸⁷⁾

次にハザールアスブは、新しい領土に多くの遊牧民を招いた。『選史』(Mustaufi/Nav'āi, 40) に、

彼の治世にロレスターンの王国は天国を羨むものになった。この理由でシャームのジャバル・アッサマークから多くの部族が彼のもとに合流した。アリー・ビン・アブターレブの子孫のアキーリー ('Aqilī) の集団、ハーシム・ビン・アブディマナーヒの子孫のハーシエミー集団、アスタルキー、ママークイーエ、バフティヤリー、ジャヴァーネキー、ビーダーニーヤーン、ザーヘディーヤーン、アライー、クートヴァンド、ポトヴァンド、ブーアズキー、シャヴァンド、ザキー、ジャキー、ハールーニー、アーシエキー、クイー・リトラヴィー、マムイー、ヤフフミー、キャマーンキャシー、ママサニー、アルムラキー、タヴァーニー、キャンダーニー、マディーハ、アクルド、クーラールド、⁸⁸⁾ その他の分散した諸部族、及び、系譜の不明な他の諸部族。

とある。また、『ムンタハブッタワールフ』(Nafazī/Aubin, 40-41) には、これら部族の名は、

アキール・ビン・アビーターレビの子孫のウカイリー集団、ハーシム・ビン・アブディマナーヒの子孫のハーシミーの集団のようにシャームのジャバル・アッサマーク出身の多数の部族、無数の部下、及び、アースタルキー、ママークイーエ、バフティヤリー、バンダーニー、ザーヘディー、アライー、クートヴァンド、ラーキー、ジャキー、ハーザフティー、マムイー、キャマーンキャシー、ママサニー、ザラキー⁸⁹⁾ のような各地各王国出身の分散した他の諸部族。

である。ミノルスキーは『シャラフナーメ』によればと、限定しつつ、これらの諸集団がすべて、シャーム出身であ

るかのよう記すが、『ムンタハブッターワーリフ』の記事を検討すると、シャームのジャバル・アッサマーク出身のアキーリー、ハーシェミーと他の集団とは明らかに区別して記されていることが分かる。またソトウーデはこれらすべてクルドとするが、最初の二集団はアラブであるから、ミノルスキー、シェプラーの記すようにアラブとイラン系諸集団としなければならない。⁶⁰ アキーリーは、『選史』(Mustaufi/Navā'i, 547) にアタバク・アフラスィヤープの重臣の中に「タージュッディーン・アリー・カーミヤール(Kamiyār)・アキーリー」がおり、『清浄園』(N, 628)では、彼が

アキール・ビン・アビーターリブの子孫である

とあるから、第四代カリフ、アリーの長兄アキールの子孫⁶⁰であって、ウカイル・ビン・カアブ・ビン・ラビア・ビン・アーミル・ビン・ササア(Uqail b. Ka'b b. Rabi'a b. 'Amir b. Sa'sa'a)族ではないことになる。また、ハーシェム・ビン・アブドマナーフは、預言者ムハンマドの曾祖父でハーシム家の指導者であったが、後にカリフ・アリーの息子ハサンの子孫がハーシム家として知られた。⁶⁰

現在もイーズの北にシャミー、シュシュタルの北東にアキーリーと言う地名が残るのは、この移住者に関係があるかもしれない。二番目の集団は、非アラブ的名称、特に幾つかの部族の名称語尾からみてクルド人にしても、ロル人にしてもイラン系であることは間違いない。これらの集団名称のうちアスタルキー、バフティヤリー、ママッサーニー、ラーキー、ジャヴァアーネキー等は近代のロル系種族の集団名称に見られる。両者を同一視する根拠は無いものの何らかの関係がある可能性は無視できない。

『選史』(Mustaufi/Navā'i, 541) N'

この集団が、ハザールアスブと兄弟達のもとに合流すると、彼等の勢力がました。シュール人の残部を武力でそ

の地方から逐い出した。彼等はいちどきにその地域で強力になった。そのあとで、シュールスタン地方をも征服し、シュール人は、ファールスに落ち延びた。

とある。また、『ムンタハブッターワリーフ』(Nafanzi/Aubin, 41)

これら部族の来着に助けられて、ハザールアスプの事業は隆盛にむかい、完全な力をえた。剣でシュール人をロレスタンから追い、奥行き一〇〇ファルサング、幅七〇ファルサングの地域を没収し、一ギャズごとに部下、諸部族に割り当て、兄弟達を各地方に置いた。

とある。ハザールアスプの国造りには、シュール人の存在が大きく関係していることが記されている。シュール人はザグロス山地南部に居住していたイラン系遊牧民で一三世紀から一八世紀までファールス中西部のナウバンジャーン(Naubanjan)に居住していた。しかし、一八世紀にロル人のママーサニー族が、彼等をこの地域から逐って以後、この種族集団は消滅し、しばらくの間は、新しいママーサニー地方が以前としてシュールスタンの名で呼ばれていたものの、今日ではガシュガイ族の一族にこの名が残るに過ぎない。⁴⁴上の史料は、ハザールアスプがシュール人をロレスタンから追放したのみならず、更に彼等からシュールリスタンをも奪ったのであるとする。

かつては、ロレスタンの半ばを占める地域にシュール人が居住していたことについて、『速史』(Mustaufi/Navā'i, 538-539)に、ロレスタンをナースィルディーン・ムハンマドが統治し、ホルシード家のムハンマド・ホルシードが摂政 (mudaber) であった(ヒラ暦五〇〇(一一〇六—七)年)と、

この時、ロレスタンの国土の半分はシュール人の手中にあった。彼等の長 (pishva) は、サイフディーン・マーカーン・ルーズビ・ハーニーであった。彼はその旧家であった。ササン朝以来その地方の太守 (hākim) であった。シュールの国の太守はナジュムディーン・アクバルと呼ばれ、今に至る迄シュール部族は彼の子孫の

支配下にある。

とある。また、『ムンタハブッタワリーフ』(Nafanzi/Aubin, 38) に

ロレスターンの半分をシュール人が占領していた。シュール人の長は彼の同時代人サイフッディーン・マールカーン・ルーズビハーニーであった。ササン朝の時代以来その時までシュールスターンの統治は彼の祖先が行なっていた。ナスイールッディーン・ムハンマドは、彼を殺し、シュールスターンの知事職をナジュムッディーン・アクバルと言う名のものに与えた。シュールスターンの知事は今に至るまで彼の子孫である。

とある。ミノルスキーは『選史』により「本来のシュールスターン」は、ナジュムッディーンを支配者として戴き、恐らくクーフ・イ・ギールーイェに当たるシュール人支配下のロレスターンはサイフッディーンによって治められていたとするが、『選史』と『ムンタハブッタワリーフ』とを併わせて勘案するところそうではなく、ナスイールッディーン・ムハンマドは、シュール人を討って、その領袖であったサイフッディーンを殺し、シュールスターンの支配権をナジュムッディーンに与えたと言うのに過ぎない。『ムンタハブッタワリーフ』に今日とある一四世紀のシュールスターンとは、当然ナウバンジャンのシュールスターンである。ナースイルッディーンが、ロレスターンからシュール人を追い出したとは書かれていないから、ナジュムッディーンは、シュールスターンの領主としての地位を保持し、同時にシュール人は、相変わらずロレスターンに住み続けたであろう。しかし、ハザールアスピの攻撃においては、シュール人はロレスターンから立ちのいたただけでなく、「本来のシュールスターン」からも撤退したのである。では本来のシュールスターンは何処にあったのであろうか。ガウバは、かつてシュール人がナースイルッディーンによって逐われるまでロレスターン内に占めていた地域を「原シュールスターン」と呼び、ミノルスキーの言う「本来のシュールスターン」を「ファールス・シュールスターン」と名付けた。ガウバが一三一一四世紀の「ファールス・

シューリスターン」と呼ぶのはアラジャーン (Arrajan)、「ザイターン (Zaitan)」、「ジャラードジャーン (Jalladjan)」、「フズク (Fuzuk)」、「マラジャーン (Malajan)」、「ニーヴ (Niv)」及びホズイスターン東部を含む地域であり、ホズイスターンの東部に属する部分を除いては、歴史的ファールス州のシャープール・クーラ (Shapur kura) に属する。シュール人は一二世紀にロル人に逐われてファールスに流入したのであるから、当然「ファールス・シューリスターン」は、大ロルの外、ファールスの内になければならないが、次に述べるようにこれらの地域はハザールアスプによって征服、併合されている。したがって、ガウバの「ファールス・シューリスターン」、「ミノルスキーの「本来のシューリスターン」は、ここにある。これはマルコ・ポーロのシューリスターンに同じであろうが、しかし、シーラーズとカーゼルの間に置かれた “She-latsz” ではない。また、シュール人占領下にあったロレスターンをクーフ・イ・ギールイーエと限定する可能性はないであろう。

『選史』(Mustaufi/Navā'i, 542) に

ハザールアスプと兄弟達は、全ロレスターン、シューリスターン、クルダールカーン (Kurdārkan)、「イスファハーインから四ファルサンクまでのクフバイエ・リルスターン (Kūnpaye-i Līstān) を自分の版図に加えた。とある。また、同じ著者の『心魂の歡喜』「地理篇」(Mustaufi/Dabirsiyāqi, 77) に

大ロルのトゥマーンは大州である。ファールスのシューリスターンと “Almestān” のクフバイエ (Qūnpaye) のクルダールカーンのいくつかの町々がこの地方の台帳の中に (記載されて) いる。

『選史』の記述では、明らかにシューリスターンは、ロレスターンの一部ではなくその領域の外にある別個の地域である。クルダールカーンについてガウバは (S. 86, 93) は「一三—一四世紀の大ロルの領域には本来のロレスターンの他にシューリスターン・ファールス、クーフ・アラカーン、ロレスターンのクーフ・バイエが属していた」と

し、「クルダールカーン」を「クーフ・アラカーン」と解釈し、アラジャーノ北方の山地でクーフ・イ・ギールーイエの別称とみなした。アラジャーノを「アラガン」、「アラカーン」と表記する例は一〇世紀の地理書『ホドウッド・アル・アーラム』に見えるとしても、「クーフ・アラカーン」と言う地名は検証されない。字形の上で最も近い「Lor-dakān」（ロルダカーン）は、今もチャハールマハル・バフティヤール州の南部、バフティヤール街道の開通までバフバーン経由でイスファハーンとホズイスターンを結んだ街道上に見える地名である。「Līstān」は写本によつては「Lor-estān」すなわちロレスターンと記されている。クーフ・イ・パーイエは、現在イスファハーン東方にある地名であるが、明らかにこれとは関係がなく、イスファハーンから四ファールサングの距離でもあるので、「ロレスターンのクーフ・イ・パーイエ」と読み、バフティヤール山地のイスファハーン寄りの地域を呼ぶのであろう。

このような活発な対外政策が、近隣の支配者と衝突の原因となったのは当然の結果であるとしてよいであろう。『選史』(Mustaufi/Navai, 542)に

サルグル朝のテキラ (Tekila) は、幾度もかれらと戦うために軍隊を派遣した。軍隊は、その度に敗れて彼のものと帰った。争いの主因は、城のなかの城、柱のなかの柱であるマインジュシト (Mānjštr) 城であった。ハザールアスプは、私はアタベクの側からのこの城の守り手であると述べていた。サルグル朝のアタベク・テキラには彼を打ち破る手立てがなかったので、和解と結婚を望んだ。

とある。また、『ムンタハブタワリーフ』(Nafanzi/Aubin, 41)に

彼の上昇の時はサルグル家のアタベク・テキラの時代にたった。幾度か彼を押し返すために出陣してきたアタベクの軍隊を破った。イスファハーンから四ファールサングまでを領地の中に加えた。ファールスからは、ヘシュ (Khe-shr) とバーフル (Māhur) までを得た。

とある。戦争の原因であったマーンジャシュト (Mānjash) すなわちマーンギヤシュトは、ミノルスキーによるとイーザジュ南西であるが、現在ロルダカーンの西にカールン川を隔てて、主峰海拔三千七百五十一メートルのクーフ・イ・ムンギヤシュト (Kūh-i-Mungash) 及び村落マーンギヤシュ (Mangash) がある。⁴⁹ここは、イーザジュのカールン川上流に当たる。ミノルスキーがマーンギヤシュトをイーザジュの南西としたのは、誤植であり、正しくは南東とするべきである。またヘシュトは、カーゼルーンの西約百キロメートルの村で、ヘレ (Helleh) 川の二つの支流上流に挟まれた地域にある。マールフルは、ヘシュトの北、クーフ・イ・ギールーイエの南にマールフル・イ・ミラーティ (Mahūri-Milāti) があるのが、これに当たろう。⁵⁰カーゼルーン、ブーシールを結ぶ線の西が、ファズルルーイエ家の領土となつたのであるが、モンゴル軍の追撃を逃れたムハンマド・ホラズムシャーが、西イランに閉じこもってモンゴル軍を迎え討つにふさわしい根拠地をさがしたとき、ハザールアスブは、ロレスターンとファールスの間の山中にあるタング・イ・ティクー (Tang-i-Tikū) を勧めた。ガウバはこれをヘフバーンとデフダシュト (Deh Dasht) の間にある今日のタング・イ・ティカーブ (Tang-i-Tikāb) であるとしている。⁵¹ミノルスキー、ルストレインジが、⁵²タブ (Tab) と呼ぶこの川は、ホズィスターンとファールスの自然の境界をなし、左岸には、タング・ティクー始め、ロルデカーン、マーンギヤシュト等が存する。『世界征服者の歴史』(Juvaini/Boyle, II, 384)によると、ホラズムシャーがハザールアスブの言を容れなかつたのは、

彼がこのような助言を行なつたのは、ファールスのアタベクに対する敵意を公然たるものとし、それによつて彼の領土が征服されるのを妨げるためである。

と考えたからであつた。いずれにしろ、ファズルルーイエ家とサルグル家の領土は、山間部でティブ、海岸でヘレの両河川によつて隔てられることが分かる。クーフ・イ・ギールーイエは、後にアタベク・アフラシヤーブが再征服を

しなければならなかったのであるから、サルグル家に残されたのであろう。

また、『選史』と『ムンタハブッタワリーフ』には具体的記載がないが、ソトゥーデ(Ⅲ, 126)は、ハザールアスプは、アタベク・テキラの娘と結婚し、テキラと言う名の息子を得たとする。『選史』(Mustaufi/Navā'i, 542)には、ハザールアスプの息子アタベク・テキラが、

ファールスのサルガル家の孫であった

とあり、『清浄園』(Ⅳ, 625)にも、

母方からサルグル家の曾孫であった

とある。この結婚は両家間の敵対関係を終止させようとするものであることは疑いないであろう。

サルグル家との間の領土上の問題を解決した後、ハザールアスプは領土内の殖産に努めた。『選史』は続けて、

ハザールアスプの事業は、絶頂に昇りつめた。農耕の可能にみえるところにはどこにでも村を開き、農民を住まわせ、一片の土地も荒れ果てたままには置いて置かなかった。

とあり、『ムンタハブッタワリーフ』にも続いて、

日に日に、彼の事業は上昇した。このあとは農耕と開発に着手し、今日ロレスターン州にある一部は耕地、一部は非耕地の村々は、彼が開墾したのである。

とある。ハザールアスプの治績は後世から高い評価を被っているのである。

ミノルスキー、ソトゥーデは、ハザールアスプ、ハザールアスプの外交政策の特徴を、カリフ及びホラズム帝国に対する二面政策であるとしている。カリフとは、『選史』(Mustaufi/Navā'i, 542)に、ハザールアスプは、

さて自分の息子テキラをカリフ・ナースィル(在位一一八〇—一一二五年)のもとに遣わし、アタベクの称号を

求めた。カリフは彼の求めを容れ、彼に勅書と榮譽を与えた。

とある。『ムンタハブタワリーフ』(Natanzi/Aubin, 41)にも同様の記述がある。更に、イブスルファウティの『総合事件簿』へジラ暦六三五(一二三七/八)年の項に(Ibn al-Fauti, 104)⁸⁴

この年、アミール・ジャマールッディーン・クシュテムル(Qushtemur)の息子、アミール・シャラフッディーン・アリーが死亡した。彼の母親はロルのマリク・アブターヘルの娘イラーン・ハトゥーン(Irān Khatun)である。

とある。二年後、六三七年にはジャマールッディーンも死亡するが、イブスル・ファウティは、クシュティムルはワジールのナースイル・ビン・メフディールと争いラームホルムズ(Ramhornz)の徴税官に左遷されたが、五九九年、ロル国王(Sahibi-Lor)アブターヘルの家に逃れ、彼の娘と結婚し、子を生じた。しかし、六〇四年帰還し、ワジートのシャフネ職を得、死亡までカリフ軍の総司令部の地位にあった(Ibn al-Fauti, 131-133)。六二二(一二二四/五)年ジャラールッディーン・ホラズムシャーが、バグダードに接近した時二万騎を率いてスルタンを撃退したのは、このグシュテムルであった(Juvaini/Boyle, II, 421-422)。

次に、ホラズム・シャー・アラッディーン・ムハンマドが、六一四(一二一七/八)年、バグダードを攻撃するためにイラーク・アジャムに進軍したが、この時、帰国のおり、王子ロルスッディーン・グルサンジール(Ghursanjir)にイラーク・アジャムを与えた(Juvaini/Boyle, II, 474)。『スルタン・ジャラールッディーン伝』(Nasavi/Minovi, 39)には、この際、スルタンはロルスッディーンに、

ジバルのマリクであるハザールアスプの娘を彼のために求めた。なんとすれば、ジバルのマリクは彼の隣人であるからである。

とある。従って、ムハンマドが、王子ギヤースッディーンのためにハザールアスピの娘をめぐつたとするホセイंकリ・ソトウーデの説 (Sotuda, II, 166) は誤りである。ジバルはイラク・アジャムの別名であるが、ナサウィーはハザールアスピを「ジバルのマリック」と呼び、ジュヴァイニー (Juvaini/Boyle, II, 382, 389) は「マリック」の称号を付している。マリックはホラズムの官制で、ハーンとアミールの間にある身分である。ハザールアスピがホラズムシャーと友好的関係にあったことは、ムハンマドと武力衝突して敗北したファールスのアタベクや、辛うじて衝突を免れたアゼルバイジャンのアタベクと比べても明らかである。

アタベク・ハザールアスピのホラズムシャーに対する態度は、チンギス・ハンの中央アジア征服後も不変であった。ジュバイニーは、モンゴル軍に追われたムハンマドが、王子ロクヌッディーンの領地イラク・アジャムに逃亡すると、まずマリック・ハザールアスピを召喚した。ハザールアスピは、対モンゴル戦の基地としてファールスとロレスターン国境のタング・イ・ティクター (Tangi Tikū) を推薦した。⁵⁶ しかし、スルタンはこの言を容れず、カールーン (Kārūn) 城に入ったので、ハザールアスピは止むなく帰国した (Juvaini/Boyle, II, 383-384)。

スルタン・ムハンマドが、逃亡の途中病死し、ロクヌッディーンも戦死した後、六一九(一二二二/三)年、ギヤースッディーンは、ケルマーン、イスファハーン、ファールスを掌握したが、六二二(一二二四/五)年にこの地方に進んだ兄ジャラルッディーンと争い、ジャラルッディーンがイスファハーンに接近したモンゴル軍撃退に忙殺されているのに乗じて、ロレスターン経由でバグダードに脱出した (Ibid., 471)。『世界征服者の歴史』には、

彼が婚姻による親族 (khusran) であるハザールアスピや他のアミール達のもとに来ると、彼らは名譽と尊敬をもって迎えたが、スルタン (ジャラルッディーン) に討たれることを恐れ、彼を送り出すことが自分達にも彼自身にも利益になると考えた。

とある。また、『選史』(Mustaufi/Navai, 496)にギヤースッディーンは、
 しばらくの間、ホズィスターンの岳父(khosur)のもとにいた。

とある。大ロルの首都イーズは、ホズィスターン州に在るのだから、両者の記述に矛盾はない。さらに、ミノヴィー引く所のジャラルッディーン・ホラズムシャーの佑筆ヌールッディーン・ムンシーの文書集(munshat)である“*Yasāyi al-risāyil wa dilāil al-fazāyil*”には(Nasavi/Minovi, 315-318)

ファールスの諸地方がスルタンの王座になった六二一(一二二三/四)年、ホダーヴァンド・ホージャ・カリーム・アッシャルク——彼の勝利の高くあれかし——は、マリク・ノスラットッディーンとの間にあった用件をお知らせするためロレスターンに派遣された。

とあり、ハザールアaspは、

その物語の中で、この使節派遣の完全なる動機が限られ、この旅行の主要な目的であった両者の関係を取り結ぶ形式を定める花嫁の顔から、万全の黒いベールをとり上げ、その実行が受け入れられた。

とある。ここでカリーム・アッシャルクとあるのは、スルタン・ムハンマド・ホラズムシャーが、ギヤースッディーンにケルマーンを与えた時、ギヤースッディーンを補すヴァズィールに任命されたタージュッディーン・ペサル・カリーム・アッシャルク・ニーシャブリーと同じであろう。父と子は同じ称号を与えられたのであろう。ミノヴィーは、ロクスッディーンが早く、即ち六一九(一二二二/三)年モンゴル人のために殺されたので、弟ギヤースッディーンが、ハザールアaspの娘をめたのでであると見なしているが、そのように言っただけであろう。

ハザールアaspの没年は、『世界を飾る者の歴史』(Ghaffari/Minovi, 170)が、ヘジラ暦六二六(一二二八/九)年とあるが、『選史』、『ムンタハブッタワーリーフ』には見えない。ヘジラ暦六五〇(一二五二/三)年とする史料があ

るようであるが、筆者にはその典拠が明らかでない。

第三章 イマードッディーンとノスラット

『選史』と『ムンタハブタワーリフ』には、ハザールアスブの没後、彼の息子テキラがアタベクの地位に即したとあり、ミノルスキー、ソトウーデはその記述に従っている。しかし、『世界を飾る者の歴史』(Chaffari/Minovi, 170-171)によれば、

イマードッディーン・パフラヴァーン・ビン・ハザールアスブは非常に高い権威の持ち主となって、イスファハーンのモウゼ・イ・ザルデ(Mauze-i-Zarde)をその地域の裁判官から四千ハーニーで買ってワクフとし、自分の墓をそこに指定した。六四六(一二四八/九)年死亡した。

とある。ここにはイマードッディーンが父の位に就いたとは記されていないが、『スルタン・ジャラールッディーン伝』(Nasawi/Minovi, 200)には、スルタンが、時のカリフに対し、モウスのバドルッディーン・ルル(Lulu)、イルビル(Irbil)のムザッファルッディーン・ゴークバリ(Gokbari)、トルクマン人イヴァ(Iva)族のマリック・シハーブッディーン・スレイマンシャー及び、

ジバルのマリック・ハザールアスブの息子イマードッディーン・パフラヴァーンに対しては、支配権を行使しないことを誓約し、また(ibid, 226)

スルタンは大ディヴァーン(Divan-i-aziz)のために、マリック・アル・ジバル・イマードッディーン・パフラヴァーン・(ビン・)ハザールアスブとマリック・イ・イーヴァ・シハーブッディーン・スレイマンシャーフに関し

て、彼等を大ディヴァーンの禁地 (haram) の中に数え、彼等を支配せず、(najda)⁵⁵を求めないことを誓っていたので、このことを悔いた。

とある。ハザールアスプ家をはじめ元来カリフの封臣であった幾人かの君侯は、ホラズムシャーの支配下に編入されていたが、カリフ・ムスタンシル(一二二六—一二四六年)は、即位後スルタン・ジャラルッディーンに対して、上記君侯に対する宗主権の放棄を求め、受諾されたのである。⁶¹そして、これが実際にどれほどの意味があったかは別にして、この時までハザールアスプ家とホラズムシャーとの関係は良好で、イマードッディーンの所領継承とマリクの官位が承認されていたのである。六二二(一二二四/五)年のカリーム・アッシャルクの書簡に、ハザールアスプの世継ぎ (vali-i 'ahd) であり、後継者 (qaim-i maqam) となるであろう大マリク (malik-i mu'azzam) とある人物 (ibid., 316) は、イマードッディーンであるとすゝノヴィーの言 (ibid., 409) は正しい。

さて、『世界を飾る者の歴史』(Ghaffari, Minovi, 171)には、イマードッディーンに続いて、ノスラトッディーン・ビン・ハザールアスプが統治権に達した。二年半その地位にあった。四四九年ズルヒツジャ年一日(一二五二年二月一四日)天命をえて、ザルデ村のバラダール・イ・ハーン (Baraderi-khan) の墓地に葬られた。

とある。しかし、ノスラトッディーンの実在を示す史料は他にはない。

さて、『闘史』(Mustaufi/Navā'i, 542)に

ハザールアスプ死亡の報がファールスに達するや、アタベク・サアド・サルグリーはシュール人がロル人によって被った敗北による損害の為に、ハザールアスプの父方の従兄弟ジャマルッディーン・オマル・ラールバー (Lālbā) とロル人、シュール人、トルクマン人の歩兵一万をテキラと戦うために派遣した。彼等はピールー (Pīrū)

城のアタベク・テキラの近くに来た。彼のもとには五百騎がいたが、仕方なく彼等を迎え討って、応戦した。敵の方が多かったので敗走したが、偶然ジャマールッディーン・オマル・ラールバーに矢が当たり、負傷した。ファールスの軍隊は敗走した。アタベク・テキラの事業は盛んとなり、更に三度にわたって、別の軍隊が彼と戦うために遣わされたが、三度とも敗北し帰還した。

とある。『ムンタハブッタワリーフ』(Nafanzi/Aubin, 40-41)にも同様の記事があり、

その後シュール人は、アタベク・サアド・ビン・ザンギー・サルグリーのもとに請願した。アタベク・サアドも
 ロル人の栄えるのを見て、心は煮えたつ思いであった。

とあって、きっかけはシュール人が、失われた領土の回復を狙って、アタベクの援助を求めたことにあるが、ファールスのアタベクにも理由があつたようである。ここにテキラとあるのはイマードッディーンと解釈すべきであるのか、それともテキラが大ロル側の武将としてジャマールッディーンと戦ったのかは、判明しない。また、『選史』にピールー城とあり、『ムンタハブッタワリーフ』には、「マーンカシユト城」とあるが、同じ城かどうかは分からない。さて、上記年代記には、ハザールアスブの死後大ロルを攻めたファールスのアタベクはサアドであるとする。しかし、サアドは、ヘジラ暦五九九一六二三(一一九一—一二二六)年の間アタベクの地位にあつたのであるから、遠征は、ソトゥーデが述べるように、アブーバクル・ビン・サアド(六二三—六五八年)が、行なったとしなければならぬ。最初の遠征で、ファールスの軍勢を率いたのは、史料にはテキラの父方の伯父の息子ジャマールッディーン・オマル・ラールバーであると言う。アブーターヘルには、ノスラットッディーン・パフラヴァーン、バフマン、イマードッディーン・パフラヴァーン、ノスラットッディーン・アフマド・イルヴァーグシュ、キズイルの五子があつたが、ジャーラールッディーンの父親が誰であるかは特定出来ない。サルグル朝には、一貫して多数のロル人が仕えて

いたことが知られるのであるが、そのなかにハザールアスプ自身の弟もいたことになる。⁶⁴

『選史』(Mustaufi/Navā'i, 543)には

この後アタベク・テキラは、大軍をもって小ロルを狙った。その時、シャジャーディーン・ホルシードの孫であるフサームッディーン・ハリール(Khalil)が小ロルの知事であった。彼等のあいだで幾度も戦いが行なわれた。ついにフサームッディーン・ハリールは彼を恐れ、小ロルの諸地方の一部がアタベク・テキラの所有するところとなり、テキラは懐かしき祖国に帰った。

とある。戦争の原因は、『ムンタハブッタワリーフ』(Nafanzī/Aubin, 42)に、大ロルがファールスの攻撃を受けたので、

この時、アタベク・テキラはシュジャーディーン・ホルシードの孫であったホサームッディーン・ハリールに援助を求めたにもかかわらず、彼は無視した。

からであった。小ロルのフサームッディーン・ハリールは、ヘジラ暦六四〇(一二四二/三)年カリフの軍勢と戦って死亡している。従って、時間的には、小ロルに侵入したのはイマードッディーンであるとしてよい。

小ロルとの戦争に続いて、大ロルは第三の敵を前にしなければならなかった。『選史』(ibid, 543)に、

ホズイスターンからカリフの將軍であったバハーッディーン・グシュタースフ(Gushatāsf)とイマードッディーン・ユーナズ(Yūnas)が軍隊をロレスターンに率いて来て、多くの破壊をなし、テキラの父の弟キズイルを捕らえ、虜にして、ラームージュ(Lānuj)の砦に監禁した。テキラはこの報復に彼等との戦いに出陣した。多くの戦闘と苦難の末、イマードッディーン・ユーナズを殺し、バハーッディーン・グシュタースフを捕らえた。彼の命を助け、キズイルが戒めから解かれ、彼のもとに送り届けられるようにホズイスターン州に送った。

とある。『ムンタハブツタワールフ』(ibid., 42)にも同様の記事があるが、

この事件の最中、ホズイスターンの知事であるカリフの代理人、バハーッディーン・グルシャスフとイマードッディーン・ユーナスが(云々)

とあり、二つの戦争が相い前後して起こっていることが知られる。すなわちカリフとの戦いも、ヘジラ暦六四〇年前後までの事件と言うことになる。すべて、イマードッディーンの治世下のことである。これらの事件の背景は、まず、成立の事情からしてサルグル朝はハザールアスブ朝に面白からぬ感情を抱いていたが、ハザールアスブ朝がホルズムの سلطان・ジャラールッディーンの支配下にある間は武力に訴えることはできなかった。しかし、ジャラールッディーンが死亡すると大ロルを攻撃することを止めるものは誰もいなくなった。一方、ハザールアスブ朝は、ジャラールッディーンに服属し、ホルズムの官位であるマリクを称していた。そのためカリフ・ムスタンシルからスルタンに対して、支配権掛除が求められた。スルタンは、カリフの要求を容れ、ハザールアスブ朝に対する宗主権を放棄したものの、この問題となった君侯四名中、カリフ軍の総指揮官、バグダードの防衛軍司令官となったスレイマンシャー以外のモースル、イルビル、大ロルの支配者とカリフは後に交戦状態に入っている。特にベクテギン家のイルビル領主ムザッファルディーン・ゴクブリは六三〇(一二三二/三)年に殺害され、所領はカリフ領に編入されている。すなわち、ジャラールッディーン没落後のカリフ領再統合は、平穏には行なわれなかったのである。イマードッディーン、ノスラットッディーンは、大ロルの支配権を行使したとしてもカリフが任命権者であったアタベクの称号はもたなかったと思われる、彼等の名が大ロルのアタベク在位表から除かれるのは、この理由からであるとも考えられよう。一二三〇年代、四〇年代のイラン西部におけるモンゴル帝国の勢力伸張もカリフ庁の対外政策を無視しては論ずることはできないであろう。

ハザールアスプ家が何時モンゴル人の軍門に下ったかを示す記述はない。南イランの他の諸侯とはほ足並みを揃えていたとして大過ないであろう。当時の状況から、モンゴル側との接触は、モンゴル軍のイスファハーン占領後であることは当然である。一二四六年のクユクの即位式にはイラン各地の王侯とともにロルの使節が参列しており (Rahid, Boyle, 181) モンケの即位後にはイスファハーン、ゴム、カーシャーンの諸トゥルイ家が関係の深いマリク・ナーシルディーン・アリーマリクに与えられている (Juvaini/Boyle, II, 518)。また、ヘジラ暦六五〇(一二五二/三)年イラン総督アルグン・アカに与えられた管轄地域の中には、モウスル、ファールス等と共にロルの名が挙げられている (ibid., II, 597)。パフラヴァーンによるモウゼ・イ・ザルデ購入とそのワクフ化、六四六(一二四八/九)年死亡したパフラヴァーン、六四九(一二五一/二)年死亡したノストラットがそこに埋葬されたことは、ハザールアスプ家のモンゴル側との良好な関係を窺わせるのである。

結 語

ファールスのサルグル朝に仕えたクルド人の小集団の長であったアブータールヘル・ビン・アリー・ファズラヴィーは、アタベク・ソソルにロレスタン遠征を命じられたが、任務の終了後征服地に残留し、自立した。ファズルイー朝の国家機構は、アブータールヘルの息子ハザールアスプのとき整えられた。ハザールアスプは、ホズイスターンのイーザジュに都を選び、シュール人をファールスに追放したあとの国土にアラブ系、イラン系の部族民を招いた。ハザールアスプの領土は、南東はサルグル朝との間、ティブ川、ヘレ川を境とし、北東はイスファハーンに二四キロメートルの地点にまで迫った。ハザールアスプは、ホラズムシャー、サルグル朝とは婚姻関係を取り結ぶ一方、カリフにアタベクの称号授与を認められ、またカリフの有力な武将であるクシュテムルの姻戚にもなった。ホラズム側か

らは「マリク・イ・ジバル」、カリフ側からは「マリク・アル・ロル」又は「サーヒブ・アル・ロル」と称された。ハザールアスプの直接の後継者は、ファールスのアタベク・テキラの外孫テキラではなく、イマードッディーン・パフラヴァーンであった。彼はザールアスプの死亡と、ジャラールッディーン・ホラズムシャー没落後の混乱に乗じて、大ロルに侵入したサルグル朝、小ロルのホサームッディーン・ハリール、ホズイスターンから侵入したカリフの軍隊と次々と戦わなければならなかった。恐らく、パフラヴァーンの後を継いだのは兄弟ノスラットッディーンで、テキラが彼のあとをおそうのは、ガッファリーの記すところによれば、一二五二年である。

本稿では、成立からノスラットッディーンまでを支配権の継承、領土、外交等の王朝史的諸問題に限って、論述したものである。フラグに率いられたモンゴル帝国の西征軍来着以前に既にハザールアスプ（ファズルイェ）朝は大ロルを中心とした広い支配権を確立していたことがわかった。イル・ハーン国、ムザッファル朝、ティムール帝国支配下の王朝史的展開、及び其々の国家およびイラン社会において、大ロルが果たした歴史的役割については、論を改めて陳述したい。

註

- (1) 本稿で用いた略号については拙稿「ヤズド・カークーイェ家とモンゴル人」『文経論叢』第二一卷第三号、一九八六年参照。
- (2) Hamdall h Mustaufi-i Qazwini, *Tarikh-i Gozida*, Bi-koushesh, Abdi al-Husain Nav'iy, Tehr. n, 1335
- (3) Muhammad Shabangari, *Majmi' al-ansab*, Belashin Mir Hashim Mahdeth, Tehran, 1362 (筆者未見)
- (4) Mir'in al-Din Natanz, *Mintakhab al-Tawarikh Mir'in*, Bi-kaushih Jan auban, Tehran, 1336
- (5) Qazi Ahmad Ghif ri-i Qazwini, *Tarikh-i Jahān Āra*, Be-hemmat Mujebr-i Minovi, Tehrān, 1342
- (6) Шараф-Хан ибн Шамс ағ-Дин Бидлисн, *Шараф-Наме*, Т. I, Пердвод, предисловие, примечания и приложении Е. И. Вачульевой, Москва, 1967
- (7) Lisān al-Sultāna Sepahr, *Tarikh-i Bahriyār*, Tehrān, 2535 (1976 A. D.)

- (8) Minorsky, V, "Lur", *E. I.* 2nd ed., vol. V, pp. 821–826; *do.*, "Lur-i Buzurg", pp. 826–828; *do.*, "Lur-i Kucik", pp. 828–829; *do.*, "Luristan", pp. 819–832; *do.*, "Shulistan", *E. I.*, 1st ed., vol. IV, pp. 391–392
- (9) Spuler, B. "Hazaraspids", *Enciclopedia Iranica*, vol. 1, 336–337
- (10) 'Al` Muḥammad S ki, *Tāriḫ-i Jighrafiyāva Tāriḫ-i Lorestān*, Khorramābād, 1346; Hamid Yazdpanāh, *Āthar-i Bāstāniva Tāriḫ-i Lorestān*, 2 Vols, Tehrān, 1350
- (11) Karim Nikzad, *Joghrafiya va tarikh-i Chahal Mahall va Bakhtiyari*, Isfahan, J. 1, 1331 (雜草米鼠)
- (12) *do.*, *Shenakht-i Sarzamin-i Bakhtiyari*, Isfahan, 1354 (雜草米鼠)
- (13) *do.*, *Shenakht-i Sarzamin-i Chahal Mahal*, Isfahan, 1357 (雜草米鼠)
- (14) Ahmad Kasravi, *Tarikh-i Pansad Sale-i Khozistan*, 2536 (雜草米鼠)
- (15) Gaube, H. *Die Sudpersische Provinz Arragan/Kuh Giluyeh von der arabischen Eroberungen biz zur Safawidenzeit*, Wien, 1973
- (16) Aḥmad Eqadari, *Khuzistan va Kuhgiluyeh va Mamasani-Joghrafiya-i Tarikhi va Athare Bastani*, Tehran, 1359 (雜草米鼠)
- (17) Le Strange, G., *The Land of Eastern Caliphate*, Cambridge, 1905; Krawulsky, D., *Iran-Das Reich der Ilhane-Ein topographische-historische Studie*, Wien, 1978
- (18) D' Ohson, C, M., *L'histoire des Mongols*, 4 toms., The Hague and Amsterdam, 1834–1835
- (19) Howorth, H., *History of the Monghols*, 4 vols, London, 1876
- (20) Spuler, B, *Die Mongolen in Iran*, Berlin, 1956
- (21) 'Abbas Eqbal, *Tarikh-i Mufassal-i Iran*, Tehran
- (22) Husein-Quli Sotude, *Tarikh-i Al-i Muzaffar, Tehran*, 1336
- (23) Minorsky, Lur-i Buzurg, 826
- (24) Sotude, op. cit., 135
- (25) Spuler, "Hazaraspids," 337
- (26) Krawulsky, 609, 622–623; *Naser-e Khosraw's Book of Travels*, tr. W.M. Thackston, Jr. N. Y., 1958, pp. 10–11; Ibn Battuta, *Voyage*, Tr. de C. Defremery et B. R. Sanguinetti, Paris, 1982, t. 1, pp. 178–179 (補遺信次記用川文庫 三五頁) cf., Sauvaget, J. "Halab", *E. I.* 2nd ed., vol. III, 85–90; Streck. M, A. R. Gibb, "Antakiya"; *E. I.* 2nd d., vol. 1, 516–

- 517; 太田敏子「ミルダース朝の軍隊編成」『イスラム世界』二五・二六号、一九八六年。かつてサマール山地には、多数のドゥルーズ教徒が住んでいた (Abu-Izzeddin, *The Druzes, Beirut, 1984*) フォスル・イェーニ族の移住は異端宗派の活動が関係しているのではないだろうか。
- (98) ロレスターンのホツラマバード南東の山海抜四〇七〇メートル。
- (99) Minorsky, “Lur”, 824
- (100) 拙稿「二一―二三世紀のロレスターン」『史朋』二〇号、一九八七年
- (101) ムカツダマは中世のレバノン山地では、村落共同体の長の称号としてもちいられていた。
- (102) ал-Хусейни/Бунятов, 234
- (103) Minorsky, Lur, 824; Spuler, *Hazaraspids*, 337
- (104) イブン・フアフタイの人名事典『ムシマウ・アル・アードアブ』(Nasawi/Minivi, 409) には、バザールアズブを “ibn B. ngir ibn ‘Aiyaz” と記しているが、“ibn Abi Taher ibn ‘Ali” と読むべきであろう。
- (105) Minorsky, “Lur-i Buzurg”, 826; Sotude, II, 147; Spuler, “Hazaraspids”, 337
- (106) 前掲拙稿参照。
- (107) Krawlsky, op. cit., 363; Le Strange, op. cit., 245; Minorsky V., *Abu Dulaf Mis “ar ibn Muhalhile’s travels in Iran, Cairo, 1955, 27, 60, 108–109; Karimi, Les anciennes route de l’Iran, pp. 10–11*
- (108) Astarki, Mamakūye, Bakhtiyāri, Javāneki Bidāniyān, Zāhediyān, ‘Alā’i, Kūtvand, Batuband, Būazki, Shvand, Zāki, Jaki, Hārūni, Āshki, Kūy-Lilavi, Mamūi, Yahfūmi, Kamānkashi, Mamāsani, Armulaki, Tavāni, Kasdāni, Madiha, Akord, Kūlard (親母音は便宜的に付した。)
- (109) Āstarki, Mamakūye, Bakhtiyāri, Bandāni, Zāhedī, ‘Ala’, Kūtvand, Rāki, Jaki, Hāzfti, Mamū’i, Kamānkashi, Mamāsani, Ziki (親母音は便宜的に付した。)
- (110) Minorsky, “Lur”, 821; Spuler, “Hazaraspids”, 337; Sotude, II, 126. ミノルスキーは、移住の原因として、アイユーブ朝のスタン・スィラフツタイーンが当時シリアに住んでいたホル人を弾圧したというシハーブツタイーン・アル・ウマリイ (Shihāb al-Din al-‘Umari) 記事を紹介している。
- (111) Vaglieri, L., L. Vecchia, “Akil b. Ali Talib”, *E. I.* 2nd ed., vol. I, 337
- (112) Renz, G. “Hashimids” *E. I.* 2nd ed., vol. III, 262–263; Watt, W.W. Montgomery, “Hashim b. ‘Abd Manaf”, *E. I.* 2nd ed., vol. III, 260

- 57 Minorsky, "Lur", 821
- 58 Minorsky, "Shulistan", 393
- 59 ベルロ・ホーロバ「シーリスタンをイラン八王国の一であると記す(愛宕松男訳『東方見聞録』平凡社第一巻昭和六年六五頁)。
- 60 Minorsky, "Shulistan", 391
- 61 Anonymous, *Huud al-'Alam*, Tr. by V. Minorsky, London, 1937, p. 45, 133 (「カ」『叢書 Cambridge, 1980, rep., p. 127, 379』²⁴ Araghan, Arragan, Arrajan の形だ(7²49²)。
- 62 Krawulsky, 364
- 63 ONC H-6, London, 1980; *Guide map of Fars Province*, Sahab Geographical and Drafting Institute, Teheran, n. d.
- 64 Busse, H. *History of Persia under Qajar Rule*, New York, 1972, p. 48 n
- 65 *Ibid.*, 48 n; Gaube, 87, 169
- 66 Gaube, 93
- 67 Huud al-'Alam, 1980, pp. 378-379; Le Strange, pp. 268-269
- 68 Ibn al-Fuwari, *Hawathih al-jami'a wa al-tariqih an-nāfi'a fi al-mi'a as-Sabi'a*, Baghdad, 1932
- 69 cf. Hartmann, A, *an-Nasir li-Din Alla (1180-1225)*, Berlin, 1975, S. 278-279
- 70 ただし「ホイルは」ミンルスキー (Shulistan, op. cit., vol. IV, 392) の説を容れこれを聲を意味する「Balur」と呼んでゐる。
- 71 «hosiir» の語義に「こゝろ」cf. 『漢語』脚注 (Mustaufi/Navai, 496)。
- 72 Spuler, *Hazaraspids*, 337
- 73 アラビア語からのロシヤ語訳には「彼等から援助を求めなむ」とある (Hacabaи/Byнтров, 260)
- 74 ドーノン佐口透訳『モンゴル帝国史』第一巻昭和四三年一六五頁
- 75 Schude, II, 126『漢史』(Mustaufi/Navai, 505) はアタマク・サアドの没年を六二八(一二三〇)年とする。しかし、いずれにしろ、ジャラルッディーン・ホラズムシャーの生前ではないであらう。
- 76 アタマク・テキラの娘がハザール家に入れた交換の人間であったのであらう。